2023年1月10日　緩和ケア病棟　ニュースレター　第2号

医療現場を看る場の提供

ー看護学生さん編ー

コロナ禍でできること

多様な働き方とタスクシフト

病棟責任者

　看護師の皆さんは、コロナ禍で感染予防対策や面会に伴う周辺業務など、患者さんへの直接的なケアへ充てる時間の捻出が難しく、葛藤を抱えながら業務にあたる３年間を過ごしてこられたのではないでしょうか。

　そんな中、実習に備えて医療現場をご自身で看て体験したいと志高く現場へ来られた看護学生さんがおられました。看護の最新の知識を学び、倫理的感性を高めている最中の看護学生さんから気付きをもらう事も多かったです。また、看護補助業務を担うチームメンバーとして、周辺業務のサポートや入院中の患者さんとの対話の時間を持ってくださったことで、看護師本来のケアへ注力できるよう人的な環境調整に繋がりました。

　2025年問題から2040年問題を見据えて、看護の担い手を今後どのように確保していくかは深刻な問題であり、自身の立場で何ができるかを日々考えています。

　緩和ケア病棟では、コロナ禍で見学実習が中心の看護学生さんの教育的な関わりの場を提供したい思いと、多様な働き方を容認しながら、看護の周辺業務のタスクシフトによって、看護の質向上へ繋げていきたいと考えています。

　医療現場で働く看護師を見て感じた事や体験を振り返り、患者さんの幸せを考え続ける意味を、看護学生さんの言葉にで伝えて下さいましたので、ぜひご覧ください。

看護学生さんのコメント

２か月間、看護助手としてアルバイトをしました。コロナ禍で実習に行けない中、病院自体をみる機会がなく、断片的に看護師さんは大変そうというイメージしか持っていませんでした。そのため、実際に看護師さんを近くで見ることができる看護助手としてアルバイトに来ました。

最初は、見学して看護助手さんや看護師さんに教えていただきながら、オムツ交換、入浴介助などの清潔ケア、食事介助など看護師さんも行う業務を経験しました。学校で学んだ事だけではなく、様々なケースに合わせて対応していかないければならないと身に染みて感じました。例えば、体位変換一つをとっても自分と経験のある看護師さんとは違うなと感じました。教科書ででてきた物と実際の物を現場で見て、授業をただ聞くことと違ってとても記憶に残りました。

朝礼などで聞こえてくる医療用語も所々聞いたことはある単語であっても理解ができず、もっと勉強していかないといけないと思いました。

終末期の患者さんと関わる中で、しっかり患者さんへケアができただろうか、あの時こうしておけばよかったなど思う事もありました。「その患者さんは幸せだっただろうか」そう考えることに意味があるのではないかと思いました。患者さんに今の自分は何ができて、これから何をできるようにしていかないといけないのか、色々考えさせられました。コミュニケーションをとって信頼関係を築くことができれば、もう少し患者さんの負担を和らげることができるのではないかと思いました。コロナ禍で交流も十分にできない状態であるため、より私達がコミュニケーションを取っていかないといけないと思いました。